

Title	李義山詩集小考 - よくは分らぬ宋版のこと - (創立五十周年記念論集)
Author(s)	荒井, 健
Citation	東方學報 (1980), 52: 441-450
Issue Date	1980-03-15
URL	https://doi.org/10.14989/66581
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

李義山詩集小考

——よくは分らぬ宋版のこと——

荒 井 健

中國の書物の歴史を(一)九世紀までの寫本の時代(二)十世紀からの刊本の時代に分け、刊本の時代をさらに二つに區分することができる。前期は寫刊併存の時期で、傳存寫本の校勘整理が盛んに行われるのと並行して、整理された寫本にもとづく木版本が次々と世にあらわれる。それらの木版すなわち宋版元版の重刻覆刻のはじまる明代以降が刊本後期、寫刊交替の時期で、十五世紀初頭永樂大典の成立が前後兩期を分つメルクマールになる。かりに刊本前期を古寫本複製(忠實度は些か疑問あり)の時代とするなら、後期は複製のまた複製の時代であり、現在ふつうに目にしうるのはせいぜいその複製なので、一口に唐詩をよむといつても、われわれがよんでいるのは果して唐の詩なのかどうか、反省の餘地が大いにあるわけだ。實のところは唐の詩人と宋元の有名無名の編者刊行者の文學趣味の混合體、それが唐詩と呼ばれているにすぎない——極論すればこうなる。とはいふものの、白氏文集(日本に古寫本がかなり存する)等僅少の例外をのぞき、唐代詩集の復元工作などむろんとつくに不可能事と化し、いまや複製はおろか複製の複製自體かけがえない根本資料なのは確かである。

唐の詩人でも、李杜韓白では流石に宋元の刊本がいくつもあるけれど、知名度が少し落ちると古刊本ひとつでもあればいい方で、王孟韋柳をはじめ、陳子昂、岑參、高適、王昌齡、孟郊、劉禹錫、賈島、元稹、杜牧……いずれもしかし。なかで李賀だけに刊本前期のテキストが三種は見られる。なぜそうなのかはまた一つの問題だが、李義山はその他の詩人たちと同様で、宋版元版は目睹することもどうやら困難のようである。ともかく宋元の舊書誌の、義山の詩集に關する記載をまず列挙してお

こう。ただしこれらが刊本かそれとも寫本だったかは、むろんさだかではない。

〔書誌〕

〔年次〕

〔標題〕

〔記事〕

崇文總目

一〇四一

李義山詩三卷

唐書藝文志

一〇六〇

玉溪生詩三卷

郡齋讀書志

一一五一

文集八卷

古賦及文共三卷・詩五卷

通史藝文略

一一六一

玉溪生詩一卷

遂書堂書目

一二二五以前

李義山集

直齋書錄解題

一二四九以後

李義山集八卷

此集即前卷中賦及雜著也

〔別集類〕

唐太學博士李商隱義山撰

〔詩集類〕

唐才子傳

一三〇四

玉溪生詩三卷

文獻通考

一三一九

(晁志・陳錄を引く)

宋史藝文志

一三四三

李商隱文集八卷

詩集三卷

さて、現行の李義山詩の諸本、多少の出入はあるが収録詩數みな六百前後、なかでも舊本の形態をより多く残すと考えられるものはいずれも三卷、唐末宋初の總集に載せる作品、又玄集の四首・才調集の四〇首・文苑英華の四七首も、すべて正集に（補遺や外集としてでなく）編入されている。もしもこれが舊書目に頻見する三卷本そのままならば、北宋以來義山のテキストに少くとも大きな變化はなかったことになるが、むろんそう簡單には行かない。(i)晁志に三卷本詩集はなく、文三卷詩五卷の「文集八卷」が著録され、陳錄の「李義山集八卷」および宋志の「李商隱文集八卷」も同じものをさすのだろう。してみれ

ば、五卷本の詩集というのは明代以降の書目類に全くあらわれないけれども、とにかく刊本前期には三卷本のほかに五卷本、少くとも二様のテキストが確實に存在していた。(2)さらには北宋ごく初期までさかのぼるならば、『皇朝類苑』卷三四に引く楊文公談苑の一條がある。

公 嘗て言えらく至道中(九九五―七)、たまたま玉溪生詩百餘篇を得、意こころに甚だ之を愛まむも、未だ其の深趣を得ず。咸平・景德の間(九九八―一〇〇七)、演綸の暇に因り、徧く前代の名公の詩集を尋ぬ。(中略)是より孜孜として求訪し、凡そ五七言長短韻・歌行雜言、共に五百八十二首を得たり。唐末、浙右に多く其の本を得。故に錢鄧帥若水は未だ嘗て意を拮據するに留めざるに、纔ほど四百餘首を得たり。錢君 賈誼1の兩句に、憐れむ可し夜半に虚しく席を前め、蒼生を問わずして鬼神を問う、と云うを擧ぐ。錢云く、其の措意此の如し、後人何を以て企及せん、と。余は其の云う所を聞き、遂つて其の詩を愛む彌よ篤く、乃ち緝綴を専らとす。2

義山生前に四六文が樊南甲・乙の兩集に自編されているが、詩作については明らかでなく、かりに編集されたことがあっても、唐末五代の混亂期を経て散逸していたのが次第に収集されつつあったことがうかがわれ、少くとも十一世紀半ば以前には、さまざまの寫本が存在し、テキストはまだ不安定な状態であったのである。いうまでもなく「公」は楊文公億(九七四―一〇二〇)、錢若水はまさしく「浙右」新安の人であった。3朱鶴齡本は、赤壁(杜牧の名詩として知られる七絶)以下の四首を、義山の作に非ずと疑がいつつも、汲古閣本その他に従って卷末に収録、定子の補注に馮班の語を引く。

馮定遠曰く、赤壁より定子に至る四首、北宋本には載せず。南宋本始めて之を有す。3

兩宋の間にテキストに混亂が生じたとされる。ただし馮班のいわゆる南宋本は全く正體不明である。現行の宋版系テキストはこの四首を載せず、宋元の總集にもこれらを義山の作とするものはない。4北宋の書に見える佚詩として、東坡と山谷の影響を受けた僧德洪(一〇七一―一二二八)の『天厨禁籟』卷下・四平頭韻法の條に、まず杜甫の飲中八仙歌を例にあげたあと、

李商隱も亦た此の體を用い、九日の詩を作りて曰く、羸(當作羸)童瘦馬 荒陂を行く、正に是れ龍山落帽の肯。丹楓の

殞葉 紛として墮飛し、黃花年年歸期に負く。此の生は半世 路岐に走り、歸心自ら雙鴻の飛ぶを逐う。故園の秋風 黍離離として、想見す父老の相い逐隨するを。乞うて路を問う 何れの時なるかを知らんや。功德未だ就らず鬢は絲を成し、鞍を解き地に坐し長く嗟咨す。^④

と、「九日詩」が引かれる。義山の九日の詩としては令狐綯を諷したとされる「曾共山翁」の七律503（作品番號は唐詩百名家全集本による。本學報五〇冊李義山詩各本篇目對照表參照。以下おなじ）が著名だが、同題の七古は今本にない。^⑤さらに最も注目すべき指摘が、崇寧（一一〇二—一〇二五）の初に點檢試卷官であつた蔡啓の『蔡寬夫詩話』のなかに爲されている。

義山詩集 感有りの篇を載せ而して無題。自注に云く、乙卯の年に感有り、丙辰の年に詩成る、と。（中略）按ずるに李訓鄭注 亂を作すは、實に冬至の日を以てし、是の年 歲は乙卯に在り。則ち是の詩は蓋し訓注の爲に作れるなり。唐の小説に此の事を記し、之を乙卯記と謂うも、大抵敢て顯に之を斥さずと云う。^⑥

ここにいうのは今本の「有感二首」269 270の五排で、その題下には確かに「乙卯年有感。丙辰年詩成。」の雙行注がある。しかし、蔡啓の目睹したテキストには題が無く、そこで「自注」のなかの二字でもって假に呼んだ。そういうことになる。だが、「載有感篇而無題」の「無題」とは、①文字通り何も題が記されてなかつたのか、②「失題」ないし「闕題」とされていたことをいうのか、③それとも「無題」と題されていたのか、その邊まったくあいまいである。この連作二篇が義山のむきつけない政局批判の詩として重視すべき作であり、また場合によっては「無題詩」の性格いかんにも響きかねぬだけに、何とも残念だが。ともかく、以上によって宋本の全體像の再構成の困難なことだけは察せられよう。

刊本前期の義山詩のテキストを文獻を通して少し窺つて見たが、輪廓は一向に判然とせず、隔靴搔癢の思いがする。そこで次にいま國內で見られる複製の複製のうち、より早い時期の、確實に宋版系と目されている本を一瞥しよう。錢謙益寫校本『李商隱詩集三卷』（宣統元年神州國光社影印）である。この錢氏寫校本には、出版に當り「校讎を董する役を爲し」た蔣斧のかなり詳密な跋文が記されており、かれの説くところはほぼうなづけるので、その線に沿いながら明清の書目類を通検して

行くと、錢氏寫校本の性質、ひいては錢氏の用いた二種の宋版の明清における流傳の狀況がある程度明らかになつてくる。ま
ず蔣斧のことばから。

此の本は東澗老人の手寫たり。朱墨の筆を以て、一再校勘す。其の標題は初め李義山詩に作り、嗣いで朱筆を以て詩を改
めて集と爲し、又た墨筆を以て改めて李商隱詩集と爲す。標題の次行、初め太學博士李商隱義山の款一行有り。嗣いで朱
筆を以て抹去し、又た墨を加え其の朱筆の校語を勒す。據る所の諸本、曰く原本、曰く鈔本、曰く又一舊鈔本、曰く一本、
曰く陳本、曰く刻本、曰く新本。⁽⁷⁾ (中略) 獨り未だ原本の自りて出ずる所を箸さず。其の墨校も亦た據る所は何の本たる
かを言わ⁽⁸⁾ず。

錢氏寫校本の大體は蔣斧のことばどおりだが、校訂が正文に重ねて書きこむかたちでされていることが多く、むろんカラー
印刷などとはちがうから、朱筆墨筆の區別はおろか文字の判讀に苦しむばあいもままある。錢氏の「原本」および「墨校」
「所據」の本については、張金吾『愛日精廬藏書志』卷二九に著録される義山詩集二部の跋文が關連してくる。まず「李義山
集三卷舊抄校本」の校訂者護淨居士(馮班の昆季行ならん、と張氏は推定する)の跋二則。一は崇禎甲戌(七年・一六三四)、
二は翌乙亥の年。

此の書は先に錢憲副春池公(未詳)の本を用いて寫す。篇次有るも卷目無し。後に牧齋錢禮部の宋版を得、始めて卷目を
有つ。又た謝行甫(未詳)に請いて之を録し、方めて善本となる。首尾十年、始めて完善たるを得たり。⁽⁹⁾〔跋 a〕
孫方伯功甫丈、一本を以て示さる。煥然として雲霧を披くが若く、凡そ錢本の疑う可きは、一朝にして氷釋す。因つて家
の定遠(馮班)・何士龍(雲)と、又た扱すること一過。(中略)孫本は三大帙、無錫の華氏の物たり。卷は凡そ三にして、
亦た上中下に分つ。遺桓の諸字は俱に避けず、其の北宋本たること疑い無きなり。(中略)乃ち知る錢本は直だ坊本のみ
と。⁽¹⁰⁾〔跋 b〕

次に「李商隱詩集三卷毛板校宋本」の校訂者陳鴻の丙戌(順治三年・一六四六)の跋一則。

孫孝若が家の北宋板本を借りて對正す。(中略)全部三卷を映鈔して完く、復た此を將て讎校し過ぐ。筆畫譌無し。〔跋c〕明清の交、江南の藏書家ないし校勘家のあいだに知られる義山詩宋版が二種あったことがこれで分る。牧齋錢謙益自身が所₍₁₎有していた「坊本」——かりに宋版甲とする。それと「北宋本たること疑い無き」「孫本」——宋版乙。錢氏はまず甲を底本とし、のちに乙を用いて校した。陳鴻〔跋c〕の校本の標題は「李商隱詩集」だが、毛板すなわち唐人八家詩本の原題は「李義山集」で、陳氏が宋版乙によって改めたにちがいない。一方、同時代の錢曾『述古堂藏書目』卷二に「李商隱詩集三卷 三本₍₂₎」が著録され、當時でも北宋本がそういくらかもあるはずはなく、この影抄のもとになったのもまた宋版乙だと考えられる。さらに述古堂の善本が錢謙益と無關係とするのは不自然で、錢氏の最終的な校定は、宋版でも遙かに勝れる乙(ないしはその影抄)に、やはりよるものと見てよい。

〔跋b・c〕に言及される、この乙本の所藏者のうち、無錫の華氏は『藏書紀事詩』卷三の華夏もしくは卷七の華燧父子か。いづれにせよ大體十五・六世紀ごろの人物たちである。そのあとを受けるのが蘇州の孫氏で、父の朝肅、字は功甫、萬曆四四年(一六一六)進士。子の某、字は孝若、錢謙貞の女婿、常熟の馮氏らとも交友あり(以上紀事詩卷三)、牧齋一族との閒柄は推して知るべしだ。ちなみに〔跋c〕の筆者陳鴻(一六一八—?)も常熟の人、紀事詩卷三に見えている。なお以後の乙本の所藏者として確認できるのは乾隆年間₍₃₎の齊召南になる。王國維『傳書堂藏善本書志』第一二冊に著録される「李商隱詩集三卷校宋本」の項。

楊稼軒の手跋に、是の書 余は乾隆甲子の年(九年・一七四四)に於て、天台の齊次風先生の宋刊本を借りて校正す、と。
(下略)

右は汲古閣刊李義山集に就きて校さる。據る所の宋本、孫孝若が家に藏せし所の北宋刊本と同じ。楊禾稼軒・禾字稼軒の諸印有₍₄₎り。

楊禾が齊召南から借りた宋本はすなわち例の孫氏本だ、と王國維はのべている。しかし齊氏からあと乙本の足どりは摺めな

い。日本はもとより、中國の現今の善本書目類にも一向見當らず、殘念ながらすでに失われている可能性が強い（筆者の速斷ならば幸いだが）。それでも乙本は宋版甲に比べればまだしもで、甲本に至っては「坊本」ときめつけられる以外、一向に素性が分らぬ。ただこの本は卷目の離ち方に大きな特徴があり、その標題の「李義山詩」は一見毛板と紛らわしいが、やはり全く異なる一本なのである。錢氏寫校本では、始め上中兩卷の境は聖女祠²⁴⁹と獨居有懷²⁵⁰だったが、寄在朝鄭曹獨孤李四同年²⁴²と南朝²⁴³に改められている。中下兩卷の境は、念遠⁴⁸⁹と過故崔兗海宅與崔明秀才話舊因寄舊僚杜趙李三掾⁴⁹⁰が、所居永樂縣久旱縣宰祈禱得雨因賦詩⁴⁷⁴と正月十五夜聞京有燈恨不得觀⁴⁷⁵に改められている。少くともいま國內で見られるかぎりの三卷本では、249および489で卷を離つものは存在せず（すべて乙本により校改された結果と一致しており）、甲本また稀絶のテキストであつてみれば、甲乙兩本の面影を傳える錢氏寫校本の價値のほども今さういうまでもなからう。

ところで康熙四七年（一七〇八）序刊『唐詩百名家全集』本義山集は、上の兩者のうち乙にもとづいたテキストなのである。百名家集編者席啓寓の自序にいう。

余 洞庭東山より、之きて海虞に遷るや、（中略）宋槧本を持ちて遺らる者も亦た日に至る。乃ち良工を募り、之が鋳版を爲し、（中略）閑居の暇に、復た訪求購輯し、次第に梓に授く。

また「輯唐詩百名家小傳凡例」にいう。

諸家の詩集、官名を以てする者有り、地名を以てする者有り、名字を以てする者有り、年號を以てする者有り。悉く宋雕の善本に照し、模勒して梓に付し、復た輕がるしく改めず、舊制に遵えるなり。

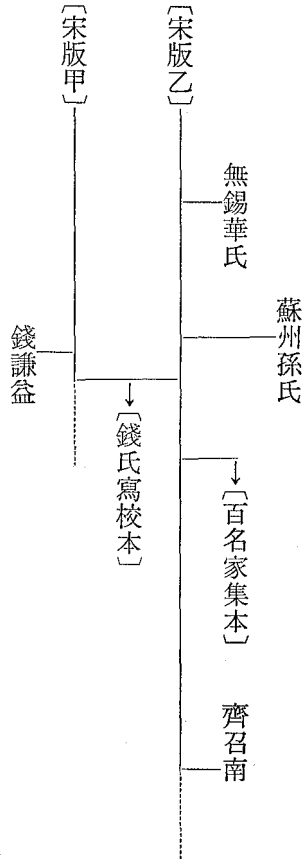
とりわけ義山を含む十八家の集の卷末に「東山席氏悉从宋本刊于琴川書屋」なる刊記をわざわざ付してあり、これは信ずるに足りよう。で、義山のばあい、その宋本がどれであつたか。この百名家集本も三卷。(1)「李商隱詩集」の標題、(2)卷頭に作者名無記入、(3)上中・中下の卷目の離ち方、すべて宋版乙と共通。(4)下卷卷末に近い夜思⁵⁸⁸の前に「續新添二十六首」と原本（甲）になかった七字を錢謙益は記入しているが、補遺詩の冒頭にこの同じ七字を置くテキストは他に百名家集本のみ。(5)個

々の字句の異同について錢氏の原本（甲）と百名家集本が一致することは殆どなく、逆に乙とはおおむね一致している。従って、百名家集本は刊行年代こそ比較的遅れるが、宋版乙をほぼ忠實に受けつぐテキストと見なしうるのである。

さて甲乙兩者に右のような相違点はあるものの、収録作品およびその排列順序が實は基本的に同一なのであるが（錢氏の校によるかぎり）、詩集として共に未整理の印象を受ける。たとえば杜棕に獻げられた五排二首^{563 564}において、後に獻げたことを詩題に明言する⁵⁶³が却って前に置かれ、明かに順序が顛倒している。また同じ詩形の作品が時折まとまってならべられているのは分體に編しようとした意圖の中絶を物語るかのようでもあるが、結局のところ分體・分類もしくは編年、そのどれにも合致しない。そうした點からすれば、たとえ乙本にしても完善的なテキストには遠いといわざるをえぬ。

刊本前期にはよく分らぬながらさまざまテクニストがあつたらしく、より内容豊富なより精良な本の存在した可能性も十分ある。が、當面われわれの前には、複製の複製の形で宋本甲と乙しかない¹⁷。そこで先ず甲が落ちる。乙の系統では、目錄に二葉半と下巻末に二葉が闕ける錢氏寫校本がやはり劣る。残るのは百名家集本で、たとえば義山詩をよむとすれば、さしあたりこれを底本とするしかないと考える。

なお甲乙二本の明清の間の流傳を表示しておこう。



注

(1) 義山の賈生劄の七絶。

(2) 公嘗言至道中。偶得玉溪生詩百餘篇。意甚愛之。而未得其深趣。咸平景德間。因演綸之暇。徧尋前代名公詩集。(中略) 絲是孜孜求訪。凡得五七言長短韻。歌行雜言。共五百八十二首。唐末。浙右多得其本。故錢鄧帥若水未嘗留意拮據。纔得四百餘首。錢君擧賈誼兩句云。可憐夜半虛前席。不問蒼生問鬼神。錢云。其措意如此。後人何以企及。余聞其所云。遂愛其詩彌篤。乃專緝綴(中文出版社影印董氏本) 首」に作り、「錢若水未嘗留意拮據」の末の字を脱する。

(3) 馮定遠曰。赤壁至定子四首。北宋本不載。南宋本始有之。(朱鶴齡注原刊本卷下補注)

(4) 李商隱亦用此體。作九日詩曰。羸童瘦馬行荒陬。正是龍山落帽晷。丹楓殞葉紛墮飛。黃花年年負歸期。此生半世走路岐。歸心自逐雙鴻飛。故園秋風黍離離。想見父老相逐隨。乞將問路知何時。功德未就鬢成絲。解鞍地坐長嗟咨。

(5) 『漁隱叢話』前集卷二九・六一居士上。

(6) 義山詩集載有感篇而無題。自注云。乙卯年有感。丙辰年詩成。(中略) 按。李訓鄭注作亂。實以冬至日。是年歲在乙卯。則是詩蓋爲訓注作也。唐小說記此事。謂之乙卯記。大抵不敢顯斥之云。(漁隱叢話前集卷二二西崑體條)

(7) 原本↓偶題二首之一479・行次西郊作566(校注に原本を引く詩題。以下同じ)

鈔本↓(未詳)

一舊鈔本↓柳枝五首537:541序文

一本↓峰156・又效江南曲380・九日503・柳枝五首537:541序文

陳本↓偶題二首之一479・行次西郊作566

刻本↓射魚曲452?・日高453?

新本↓有感二首之二270・柳枝五首537:541序文・謝往桂林587

李義山詩集小考

(8) 此本爲東澗老人手寫。以朱墨筆。一再校勘。其標題初作李義山詩。嗣以朱筆改詩爲集。又以墨筆改爲李商隱詩集。標題之次行。初有太學博士李商隱義山款一行。嗣以朱筆抹去。又加墨勒其朱筆校語。所據諸本。曰原本。曰鈔本。曰又一舊鈔本。曰一本。曰陳本。曰刻本。曰新本。(中略) 獨未嘗原本所自出。其墨校亦不言所據何本。

(9) 此書先用錢憲副春池公本寫。有篇次無卷目。後得牧齋錢禮部宋版。始有卷目。又請謝行甫錄之。方爲善本。首尾十年。始得完善。孫方伯功甫丈。以一本見示。煥然若披雲霧。凡錢本之可疑。一朝水釋。因與家定遠何士龍。又校一過。(中略) 孫本三大帙。爲無錫華氏物。卷凡三。亦分上中下。遵桓諸字俱不避。其爲北宋本無疑也。

(10) (中略) 乃知錢本直坊本耳。

(11) 孫孝若家北宋板本對正。(中略) 映鈔全部三卷完。復將此讎校過。筆畫無譌。

(12) この影抄本は季振宜の手に渡ったと考えられる。『季滄葦書目』(宋元板雜書)に「李商隱詩三卷照宋抄」と見える。

(13) 楊稼軒手跋。是書余於乾隆甲子年。借天台齊次風先生宋刊本校正。(下略)

右就汲古閣刊李義山集校。所據宋本。與孫孝若家所藏北宋刊本同。有楊禾稼軒。禾字稼軒諸印。

(14) 余自洞庭東山。之遷於海虞也。(中略) 持宋槧本見遺者亦日至。乃募良工。爲之鑄版。(中略) 閑居之暇。復爲訪求購輯。次第授梓。

(15) 諸家詩集。有以官名者。有以地名者。有以名字者。有以年號者。悉照宋雕善本。模勒付梓。不復輕改。遵舊制也。

(16) 李嘉祐 襄閣集

韋應物 韋蘇州集

郎士元 郎刺史集

韓愈 昌黎先生詩集

王建 王建詩集

- 于鶴 于鶴詩集
- 顧非熊 顧非熊詩集
- 李羣玉 李羣玉詩集・李羣玉詩後集
- 曹鄴 曹鄴詩集
- 司馬扎 司馬扎先輩詩集
- 于鄴 于鄴詩集
- 李山甫 李山甫詩集
- 許琳 許琳詩集
- 韓偓 韓翰林詩集
- 吳融 唐英歌詩

(17)

李建勳 李丞相詩集

複製の複製としては他に「李商隱詩集三卷 清影宋抄本 三冊」(北京圖書館善本書目) 卷六〇があるが未見。七八年版の安徽師範大學中文系選注の『李商隱詩選』はこの本を校勘に用いている。同書二九・六四・七二・九一・一〇二・一一八・一二六・一三六・一三八・一四一・一四五・一四九・一五三・一九六・二〇六の各ページ参照。

臆測をあえてすれば、この北京圖書館藏本は四四六ページでふれた述古堂↓季滄葦舊藏書かもしれない。